高崎経済大学論集　第49巻　第２号　2006　105頁～114頁

〈研究ノート〉

現代のコミュニケーション環境と コミュニケーション論をめぐって

高　松　正　毅

Today's Communication Theory and Communication Environment

Takamatsu Masaki

１．はじめに

筆者の目指すところは、大学生のスキルアップにつながる効果的な授業の設計構築にある。そして現在、スキルアップを目指したい対象に「コミュニケーション能力」がある。

そのためにまず、「コミュニケーション能力」とはいったいどんな能力かを明らかにしたい。対象が何ものであるかがしっかりと把握できなければ、何をどうすれば良いかも決することはできないからである。

本稿は、その序説として、現代のコミュニケーションをめぐるいくつかの問題点を指摘し、コミュニケーションに関与的な要素の洗い出しと、今後の研究の方向性を探ろうとするものである。

２．「コミュニケーション能力」とは何か

この能力に注目するのは、コミュニケーション能力が、いま社会で最も求められている能力だと感じられるからである。

コミュニケーション能力が大切だとする企業人は多い。また、社団法人日本能率協会が行ったアンケート[1]でも、今後伸ばしたい能力として「コミュニケーション能力」が31％と、「語学力」の32％に次ぐ高い結果を示している。語学力もコミュニケーション能力の一種と考えれば、１位と２

1　「会社や社会に対する意識調査」同協会主催の「新入社員向け公開教育セミナー」（2006年３月27日～４月14日）参加者を対象に、研修日初日に調査票を配布、翌日回収。863（男592、女268、無回答３）名の回答を得た。なお、社会経済生産本部の調査（1961人を対象）でも同様の結果が得られている。

位を独占していることになる。また、外国語（第二言語）の能力が母語（第一言語）の能力を超えるとは考えられないから、何よりもまず必要となるのは、日本語（母語）によるコミュニケーション能力だろう。

ところが、この能力は「コミュニケーション能力」「コミュニケーション力[2]」「対話力」などと、その呼称も一定せず、中身となるとなおさら判然としない。

今、たまたま筆者の手許にあるビジネス書には、「相手の目線に合わせて、相手のことを想い、相手に通じる手段として物事を語りかける能力[3]」とあり、相手の状況への理解を強調している。しかしコミュニケーションとはやりとり、すなわち双方向的なものである。したがって、一方的に伝達する能力（「表現力」に近いもの）だけが優れていてもコミュニケーション能力が高いとは言えないであろう。つまり「話し方教室」などに通い、話術の巧みさだけを訓練しても関連は薄いものと考えられる。

今ここで、筆者なりに「コミュニケーション能力」を定義すると「初対面の相手であっても適切な人間関係を素早く構築でき、対話や交流が円滑かつ巧みで、具体的な対応も迅速かつ的確なために同僚や顧客からの信頼も厚く、事務処理能力にも優れる。」くらいになろうか。会社のトップ、あるいは企業の側から見て「仕事ができる」のひと言に尽きるような内容である。

しかし、現代の大学生は、そこに到達するのに必要な「基礎能力」が欠けてしまっている。基礎や下地のないところに応用や発展などあり得ない。拙稿で、現代の大学生は言われたことすらきちんとこなせないと述べた[4]。現実に、時間を守る、挨拶をするといったごくごく基本がきちんとできるだけで、大学生としては人並み以上と言えるだろう。

時間を守る、挨拶をするといったことは、何か特別な能力というよりは、モラルやマナー、しつけや礼儀作法に属する問題である[5]。当然「学力」とも言えない。そうなると、これは「教育」でなんとかできる問題ではなく、それどころか教育にはなじみにくい問題だとすら言える。指導としては、清水義範の言う『行儀よくしろ。』（2003年刊ちくま新書）以外にはないであろう。

これらの「基礎能力」は、「能力」と呼ぶのもためらわれるほどであり、「教えられる」あるいは「改めて意識的に学ぶ」といった類いものではない。そして、これら一人前の人として身につけるべきモラルやマナーが低いことの元凶は、どうやら日常生活のあり方にあるようである。

2　斉藤孝（2004）岩波新書など。なお、本稿では「コミュニケーション能力」で統一する。

3　大竹美喜（2004）『仕事で本当に大切にしたいこと』かんき出版　著者の大竹は、アメリカンファミリー生命保険会社の創業者である。

4　高松正毅（2006）「学生に考えさせるために――学生の傾向と諸問題――」『経済学部におけるアカデミック・リテラシー教育に関する基礎的研究』平成17年度高崎経済大学特別研究報告書　p.9.

5　当時、予備校河合塾の理事・進学教育本部長であった丹羽健夫によると、マナーがまったくできていない新入浪人生が初めて現れたのは1996年の春のことだという。「授業に遅刻してくる生徒が大勢いる。遅れて来ていながら罪の意識など全くなく、入口の所から友だちに大声で挨拶し、晴れやかに席に着く。私語は交わす。鞄から漫画の本を取り出して嬉しそうに読む」丹羽健夫（2004）『予備校が教育を救う』文春新書　p.69.

3.「コミュニケーション能力」は低下しているか

まず疑問となるのは、今日どうしてこれほどコミュニケーション能力が求められるのかである。

第一に考えられるのは、その能力が低下した、あるいは低下したと感じられているのではないかということである。今日発生している人間関係に関するトラブルの多くが、コミュニケーション能力の低下に起因する、あるいは少なくとも遠因があるとする見方である。子どもばかりでなく大人が、それも教員までもがまともな口がきけないで事件を起こしている[6]。ここですぐに気づくのは、数多くの事件[7]にインターネットやメールなどが関与していることだ。しかし、ネット上への書き込み（ブログ、掲示板、チャットなど）やメールが、これら事件を引き起こした原因とは言えないであろう。確実に言えることは、書き込みやメールなどの個の中に埋没沈潜したモノローグでは、事件の抑止力とはなり得ないということである。

第二に考えられるのは、今求められているコミュニケーション能力が、時代の要請として、まったく新規に必要となってきた能力だということである。

おそらく、どちらか一方ということではなく、この問題は、これらの両面を兼ね備えていると考えるべきであろう。すなわち、コミュニケーション能力は確実に低下もしているし、同時に新たに求められてもいるということだ。

さて、作家の中島梓が『コミュニケーション不全症候群』を著したのは、バブルが崩壊した1991年のことである。

中島は「コミュニケーション不全症候群」の特徴として

一、他人のことが考えられない、つまり想像力の欠如。

二、知合いになるとそれがまったく変わってしまう。つまり自分の視野に入ってくる人間しか「人間」として認められない。

三、さまざまな不適応の形があるが、基本的にそれはすべて人間関係に対する適応過剰ないし適応不能、つまり岸田秀のいうところの対人知覚障害として発現する。

と述べ[8]、次のような実体験を挙げている。

「はじめて子供を幼稚園に入園させて、その送り迎えで幼稚園に毎日出かけるということにな

6　神奈川県平塚市内にある県立高校の男性教諭（53）が、教え子の女子生徒に「愛しています」「何年かたって機会があったら合体しましょうか？」といった内容を含む921通の携帯メールを2004年６月から半年ほど送信し、2006年に懲戒免職になった事件。2006年に甲府市立大里小学校の男性教諭（44）が、好意を持つ教え子の少年（15）に、「おれを避けていると暴力団がお前を捜して痛い目にあわせようとしている」という内容の携帯メールを十数回送って脅迫し、逮捕された事件など。

7　2004年に長崎県佐世保市で起きた小６女児同級生殺害事件、2006年に岐阜県で起きた中津川女子中学生殺害事件など。

8　中島梓（1991）『コミュニケーション不全症候群』筑摩書房　ここでは2005年刊のちくま文庫版に寄った。p.38.

ったときのことである。（中略）そのときに、とにかくひどく人に突き当たるお母さんがいるのである。つきあたるというか、なんというかまったく私とかほかの人間などこの世の中に存在していない、というようにふるまっている。うまくいえないのだが、つまりバックしたりとか方向転換したりするときに、必ずそこに誰も邪魔者はいないことを全く確信して、というよりも邪魔者などというものはこの世にありえない、というような動き方をするもので、いちいちうしろの人の足をふんづけたりつきあたったりするわけだ。これは必ずしも、注意して見ていると私一人にそういう態度をしているわけでもなんでもない。（中略）つまり彼女はまわりに人がいる、それもいっぱいいるなどと、夢にも気付いていなかっただけのことなのだ。（中略）

そのうちにそのお母さんとも知合いになり、話をするようになり、互いに顔をよく知っているようになると、そのお母さんの「運動神経障害」はいっさい消滅したのであった。

というか、彼女はあいてをよく知っている人だと認識すると、決してその人の足を踏んだり、まるでそこに空気しかないようにふるまったりしなくなったのである。（中略）つまりそのとき、彼女が相手を認識することによって、相手ははじめて彼女の知覚のなかに存在したのである。それまで石ころかそのへんの空気にすぎなかったものが、はじめて名前があり、家族や本人の意識もある「他の人間」として彼女に認知されたのだ。[9]」

この事実は、千葉県で起きたバイクに二人乗りしてひったくりをし、逃げる途中で少年の一人が怪我をした事件で、もう一人の少年が、「友だちに悪いことをした」と友人の怪我をさかんに気にかける一方で、被害者の怪我を心配する言葉は、ついに最後まで口にしなかった事実[10]と符合する。

すなわち、自分の知り合いや仲間以外は人間とはみることができず、結果としてまともな人間関係を築くこともできない。相手と向き合い、見据えるためには実は対立するのが一番である。ところが、この状況では対立する以前に、相手が全く視野に入っていない。これは社会の成熟化に伴う共同体意識や一体感の消失の顕著な表れだろう。

それ以前に、日本には良好な関係維持のために、言いたいことも口にしない文化風土が根深い。対立どころか、対立そのものの存在があらわになることを避ける。とにかく見かけだけでも、波風が立つことを極力嫌う。

ところが、パレスチナ問題や日本の竹島問題を持ち出すまでもなく、人はたとえばそれが誰のものであるかにより激しく対立する。そして、それが殺し合いに発展することもしばしばである。「みんなで仲良くすれば良いのに」では何も解決はしない[11]。

すなわち、**「この世に対立があることを認め、その対立を言葉によって乗り越えて行く術（すべ）を鍛え**

9　前掲注７　pp.18-20.

10　土井隆義（2004）『「個性」を煽られる子どもたち』岩波ブックレットNo.633　p.15-6. なお、加害少年に罪障感がなく、被害者に対する謝罪の気持ちが見られないことは、小林道雄（2001）『退化する子どもたち』現代人文社に詳しい。

11　末尾参照のこと。

ることが、「コミュニケーション能力」の向上には必須である。」と言える。

ところが、先述のように「相手を受け容れる」というコミュニケーションに入る以前の段階がもはや十全に機能しなくなっている。そして目の前や隣にいる人間と触れ合うことを苦手とする人が増えている。家族でありながらメールで会話する親子。友達のうちに遊びに行って、ばらばらにテレビゲームをして無言で遊ぶ子どもたち。さらに成人してなお、生身の女性とは付き合うことができず、マンガやアニメなどの二次元の世界やフィギュアやアイドルなどの世界に癒しや安らぎを求める人々。メイド喫茶などのバーチャルな世界に浸る人もいる。それらは、そのことだけを取り上げれば必ずしも悪いことではないかもしれない。しかし「遊び」としてではなく、現実の世界を目の当たりにすることができないがために、現実からの逃避としてそこに逃げ込んでいるのであれば重大な問題である。それは他者とのコミュニケーションを徹頭徹尾拒絶するあり方だからだ。

以上から、「コミュニケーション能力」の向上のために言えることは、次の二点であろう。

１、相手が自分の仲間うちではダメである。

初対面の相手や、年齢や職業、置かれている環境などが自分とはまるで異質の相手との対話訓練でなければ能力の向上には効果が薄い。

２、パソコンや携帯電話を通したものではダメである。

生身の血の通った相手を、目の前において直に行うものでなければ能力の向上には効果がない。機械はあくまでも、本物のコミュニケーションを補完する力しかなく、真のコミュニケーションにとって代われるものではない。

道具を使ったコミュニケーションは、それ以前に直にふれあう対話がある場合にのみ、それを補う形で有効となるだろう。携帯メールやＥメール、チャットだけでは、コミュニケーション能力は向上して行かない。

メールが打てること自体や、単にインターネットや携帯でつながっているだけではコミュニケーションとは言えない。また、ごくごく普通にできることをやり続けたところで能力の向上には結びつかない。これは、呼吸や歩行など、いくら繰り返しても上手くはならないのと同じである。しかし、より高度な呼吸法や歩行法は実は存在し、それを身につけるには訓練により鍛えるしかない。

コミュニケーションを、目の前にいる生身の人間を相手に親しく行う「直接コミュニケーション」と、パソコン画面や携帯メールなどを通じて行う「間接コミュニケーション」とに分けて考えるとき、メールやチャットなどの二次的なコミュニケーションが、コミュニケーション能力の低下をもたらすとは必ずしも言えないであろう。しかし、「直接コミュニケーション」を欠いたまま、「間接コミュニケーション」が主となってしまうことは、コミュニケーション能力の向上を阻害するとは言えそうである。

「間接コミュニケーション」が能力の低下を招くことはないが、能力の向上を阻むことがあるとは考えられる。「間接コミュニケーション」は、能力の向上につながる「負荷」とはなりにくい。

４．コミュニケーションの困難さを際立たせる社会状況の変化

社会状況の変化により、今まで自然と培われていた能力が培われなくなったとすれば、新たに訓練しなおす必要がある。また、社会状況の変化により、新たに身につけるべき能力が増えたとすれば、これも新たに訓練を施す必要がある。

岡本薫は「『はっきりものを言わずに察し合う』には率直に言い合うよりも高度な思考力を必要とするのだということを、日本の人々は国際的に主張してこなかった。[12]」と述べているが、そもそも日本人自身が、あいまいに表現し察し合うことがいかに通じ合えないか（＝すなわち、いかに高度か）を理解しようとしてこなかった。そして、今も理解しているとはいえない。これは英語教育が一向に成功していないことからも明らかであろう。

言明や言挙げによるものに限定すれば、日本人がコミュニケーション能力を身につけたことは歴史上一度もないと言って良い。そして現在も相も変わらず、サイレント・コミュニケーション[13]に頼り切っている。それどころか、土井隆義の報告では、「親密圏」において極度に気を遣う非常にまずい状況が小中高校で進行しつつある[14]。

我々日本人は今、チェンバレンやウェストン、ラフカディオ・ハーンをはじめ、外国人がものした日本論・日本人論から「日本人とは何であったか」「日本文化とはどんなものであったか」をもう一度学び直すべきだろう。日本人のコミュニケーションは欧米のそれと比べると特殊だと言われてきたが、いったい何がどのように特殊かを、明確に認識しておいて損はない。もっとも『逝きし世の面影』[15]を著した渡辺京二によれば、それら日本人の美徳はすでに明治時代には滅びてしまったという。

すなわち、今から百年以上前の日本には、日本人のコミュニケーションが確かに存在した。ところがそれは、明治維新、大東亜戦争、高度経済成長、バブル崩壊などを経、同時に進行した都市化・核家族化・少子化などの社会の変化を受けて、完全に消失した。

過去の日本人のコミュニケーションが、「高度な思考力を必要と」したことが事実だったとしても、現在は失われてしまったのだから仕方がない。また、日本の文化が他に類を見ない特異なものであるとすれば、どれ程「国際的に主張した」ところで、異民族との間に成り立ち得るようなものではない。さらに、他に類を見ない特異な文化である以上、単純に考えても多勢に無勢で、グローバルスタンダードになどなり得ないこともまた明らかであろう。

我々の取るべき選択肢は、なくした力を復活させるか、新たな力を創出するかの二つに一つしか

12　岡本薫（2006）『日本を滅ぼす教育論議』講談社現代新書　p.29.
13　精神科医吉田脩二による。
14　土井隆義（2004）『「個性」を煽られる子どもたち』岩波ブックレットNo.633
15　1998年葦書房刊。2005年に平凡社ライブラリー。

ない。なくしてしまった力は確かに魅力的ではあるが、復活は到底困難であるばかりか、今日のグローバル化時代にはそぐわないものであるとしか言いようがない。

明治以前の日本には察しあえる土壌、すなわち分かり合える均質性や一体感が存在した。ところが、理解不能な若者に対して「新人類」や「不思議ちゃん」といった言葉が産み出されたことからも明らかなとおり、現在それは完璧に崩壊したのだ。したがって、社会の変化に則して社会そのものの変革を目指し、新たなコミュニケーション法の確立を目指す以外に道はないのではないか。そして、新たなコミュニケーション法を確立するには、文化や風土そのものから変えて行くしかないのではないか。もっとも、これは本稿で考えるべき問題ではない。

ここで、稲村博によるアパシーを生んだ社会の変化[16]を確認しておこう。

「過去の状況」

- i　三世代同居と多子
- ii　短命早世と死・病気
- iii　農業社会――全員参加
- iv　低学歴
- v　生活のルール、リズム、ゆとり
- vi　口コミ
- vii　自然と信仰

「現在の状況」

- i　核家族化と少子化
- ii　長命と高齢化
- iii　サラリーマン化と共働き
- iv　高学歴化と受験戦争
- v　多忙化と人間関係希薄化
- vi　リズムとゆとりのなさ
- vii　マスコミと情報化
- viii　ハイテク化とコマーシャリズム
- ix　非自然化と原始宗教化
- x　スピードと能率――画一性と没個性

都市化による交通量の増加や、子どもを狙った犯罪の増加、さらには少子化などもあり、おもてを駆け回るガキ大将たちは消え去った。結果として、子どもの運動能力は確実に落ちている[17]。筆者が考える一般則は「使われる能力は維持または発達し、使われない能力は衰える」という至極単純なものである。

上記、「過去の状況」のｉ三世代同居と多子、ⅲ農業社会――全員参加と、「現在の状況」のｉ核家族化と少子化、ｖ多忙化と人間関係希薄化などが、コミュニケーション能力の低下には関与的かと即座に感じられるものである。筆者は先に拙稿で、都市化・核家族化にともなう「儀式性の消失」を指摘しておいた[18]。

16　稲村博（1989）『若者・アパシーの時代』NHKブックス　pp.96-105.
17　文部科学省「体力・運動能力調査結果」、「平成17年度神奈川県児童生徒体力・運動能力調査報告書」ほか。
18　高松正毅（2005）「「論文の読み方・書き方」覚え書」高崎経済大学論集第47巻第４号　p.197-9.

５．大学教育にできること

今日の日本の大学では、勉強することよりも、就職さえできれば学生は幸せと言えそうである。したがって、企業に求められる人材の育成、さらには社会を良くする人材の育成が、我々大学教員には今求められていることだろう。ところが、ニートやフリーターの増加を見ても分かるとおり、学生は勉強をしないどころか、働きたくない者が一定数いるのが現実である。そしてこのことは、学生に顕著に見られる「できるだけ楽をして（実質なしに）、（実質を伴わない）表面的な良い結果ばかりを追い求める」風潮の表れであるともいえる。教育者としては、努力することのすばらしさを伝えたいが、それが大学教育にできることなのか、あるいはすべきことなのか、筆者は自信が持てないでいる。

上述してきたことを受け、筆者が、現在描いている現状把握の構図は次のとおりである。

都市化・核家族化により農村社会や大家族が消失した。加えて、進学率の高まりと高学歴化に伴い、働き始めるのが極めて遅くなった。そうなると生活実感や自分の生きる現実世界へのリアリティがどうしても欠損してしまう。また額に汗して働く経験がないことは、実感としての自己の肉体の獲得をも困難にする。肉体の獲得がないことは、ことばが十全に獲得されない[19]ことを意味する。同時に、実感としての肉体の獲得の失敗は、「自己」そのものが揺らぐことにつながり、結果として他者と触れ合えない身体となる。

この治療のために必要となるのは、異質な他者との「ふれあい」（＝コミュニケーション）であろう。「コミュニケーションを習得するためにはコミュニケーション」という至極当たり前の結論である。

また、「ふれあい」を学ぶには演劇が最も効果的だと考えられる[20]。ところが、ここでも文化の差を感じざるを得ない。英米の高校・大学では「ドラマの授業」（いわゆる「演劇」ばかりではなく、詩や文学作品の一節や有名なスピーチなどのレシテーション（暗誦）・プレゼンテーション等のオーラルの訓練）があるのが普通だからである。

とりあえず、我々教員が教場でできることとして、学生の「発言を封じない」ことがある。中山義道の嫌いな言葉の一つ「言い訳するな[21]」を教員は禁句とし、どんなバカげたことでも学生にどしどし発言させることである。

このことは、「論文の読み方・書き方」の冬合宿で福田敦史氏が筆者に対して指摘したことであ

19　これは、単なる「語彙力の低下」のことではない。具体的な事実に基づかない感覚的かつ漠然とした物言いをしていながら、そのことに気づかないでいる状態を指す。なお、言語能力の低下は思考力の低下に直結する。拙稿「ことばのパワー」『Intro～学びへのいざない2006』高崎経済大学経済学会　pp.47-8.を参照のこと。

20　筆者は竹内敏晴演劇研究所の第14期生として演劇を学んだ。

21　中山義道（2000）『私の嫌いな10の言葉』新潮社

る。筆者は今まで学生の無知に基づくデタラメな発言に対しては途端に激昂し、ときに痛罵してきた。しかし、そのような対応は発言を封じるものでしかない。

さらに、学生の発言を促すために、もはや講義は全廃すらしても良いのではないか。内容を理解すれば良いものは教科書を指定し、試験を実施すれば良い。あるいは e-learning やビデオに頼れば良い。すなわち、大学は全ての授業を少人数のゼミ形式にし、授業中発言せざるを得ない状況を作りだし、学生を追い込む。社会人など言語能力に優れた人たちを大学にどんどん入学させ、異質な他者とふれあえる機会を増やす。そしてすべての出来事、思考を言語化させる訓練、対話や討論の訓練を徹底して行う。

大学の授業をどうするか、それが今後の課題である。

（たかまつ　まさき・本学経済学部助教授）

注11

「書きたい気持ち」がわいてくる

5　イラスト作文②
絵を見て書こう

上の絵を見て、どんな場面か想像し、二百字程度の文章を書きましょう。
絵がなくても、場面を思い浮かべられるように書きます。

一枚の絵を見て、文章を書く問題。前回は、いろいろなものに見えるあいまいな絵でしたが、今回の絵は、ずっと具体的です。逆に言えば、その分制限が多いとも言えます。例題では、「女の子がボールを持っている」「何か言い争っている」といったことは明らかで、勝手に変えられない部分です。「何と言っている？」「見ている子は何と思っている？」など、想像の余地のある部分を、自分なりに決めて書いてみましょう。

例題5

次の絵を見ましょう。

例題5　解答例

「この場所、わたしがとってたのよ。」
「ずるいよ、きのうも恵子ちゃんたち、ここ使ってたじゃない。そのボールだって、クラスのものなのに。」
校庭で、恵子と真由美がにらみ合っている。どうしよう、それぞれのグループの子が来たら、おおさわぎになりそうだ。みんなでいっしょに遊べば、ドッジボールの試合だってできるのになあ。でも、何も言えない。

安武真理（1999）『「文章の書き方」がミルミルうまくなる本』PHP研究所　p.28-9.

この書は小学校高学年から中学生向けの文章指南書である。類書がなく、なかなか優れた本だが、例題５の解答例のような「何も言えない」状態では「コミュニケーション」の指導は絶対にできない。